

クウェートでの一年（クウェート留学体験記）

大阪大学外国語学部 4年 保道晴奈（やすみちはるな）

授業終了まであと2週間で切った。あれほど友達と「朝9時の授業に行きたくない」と騒いでいたが、後2週間しか残っていないとなると感慨深いものがある。

およそ1年間のクウェート生活は楽しいことばかりではなく、悩んだり苦しんだりしたことももちろんあった。体調を崩したり、授業についていけなかったり、そもそも外出するのに一苦労だったり、とにかく日本で自由にできることが思い通りにできないことがストレスだった。

それでも徐々に友達が増え、クウェート人やクウェート在住の外国人の友人にはいろいろと教わりつつ、ランゲージセンターの友人とは助け合いつつ、生活に慣れていくことができ、こちらでの生活を楽しむことができるようになった。そして、何よりも、曲がりなりにもこちらで生活できるようになったことで自分に自信が持てるようになった。外国語学部在籍しながらも海外経験が全くなかったのも、そういった点での苦労は本当に多かったけれど、今は本当に留学してよかったと思っている。

### 【大学・授業・勉強】

秋学期は到着の遅い学生が多かったため徐々に学生が増えていっており、授業担当の先生も授業に参加する学生も流動的だったが、春学期はレベル別4クラス編成になり、私はレベル3のクラスを受講した。クラスメイトは院生や留学経験者が多かったこともありみんな優秀で、私が授業についていけないときにはよく教えてもらっていた。

授業についていけないというのは、先生が最初から全て早口のアラビア語で授業をされていたからだった。まず、宿題を聞き取るのが一苦労で、他は意外にもアラブ人である先生の手書き文字が読めないというのもつらかった（これについてはみんなで文句を言ったことがあるが）。また、日本でもアラビア語を専攻しているが、作文やスピーキングの練習をあまりしてこなかったため、アラビア語をバリバリ話している同級生に気後れすることが多かった。

それでも数をこなせば意外となんとかなるもので、春学期にはエッセイもだいたい書けるようになり、サマーコースの間にちょっとした日常のことを書いた文章を先生やアラブ人の友達に褒めてもらえるまでになった。わからないことは素直にわからないと質問すること、できないなりにやってみることが大切なのだと実感した。

私のクラスの担当はシリア人、エジプト人の先生だった。特に春学期にはエジプト人の先生に大変お世話になった。授業の題材はアラブの人口について、アラブ連盟、結婚、賃貸物件の契約など、これから役に立ちそうな内容のリーディングや、テーマを決めてディベートをするなど、とにかく多岐にわたるものだった。スピーキングが苦手な話を求められる授業がよかったが、だからこそ良い練習になったと思う。

授業の前後に、よく友達と図書館で勉強した。大学には立派な図書館があるが、いつも閑散としているので座れないということはない。しかし、図書館に人があまりいないということから分かる通り、クウェート大学の学生は決して勉強熱心というわけではなく、その雰囲気はランゲージセンターにもあるので、その怠惰に流されないように自分でコントロールする必要があったと自戒している（理系は違う雰囲気らしいが）。

サマーコースは男女別のクラス編制で、文明（歴史）、文学、文法の3つの授業を受けることになる。最も大変な学期と言われるが、語学学習中心だった秋学期と春学期に比べ、「アラビア語で学ぶ」ということをしなければならないので、必然的に勉強しなければならない。もし春学期でクラスのレベルを落としていたら、私はサマーコースに全くついていけなかったと思う。

サマーコースで一番楽しかったのは文法の授業だ。この授業ではアラブ式のアラビア語文法を0から学んだ。というのは、私が日本で学んできたアラビア語文法は日本的（もしくは英語的）解釈のアラビア語文法であり、そもそも文法用語からしてアラブ式の文法用語と全く違うのだ。まずは品詞の種類、そして「私は学生だ」というごく簡単な文におけるそれぞれの語の働きがどういうものか理解するという、本当に基礎的なところからの学習だったが、日本語や英語で説明しきれないものがアラビア語では綺麗に説明がつく。アラビア語の奥深さを改めて実感した。

## 【生活面】

生活の基盤はやはり寮とランゲージセンターで、ランゲージセンターの友達とは平日はいっしょに自習し、休日に買い物や食事へ行くなど、共に過ごした時間が本当に長かった。彼らとはいつかまた世界のどこかで出会えたらと思う。

また、日本語クラスの生徒さんにもよく遊んでもらった。日本語とアラビア語で会話する練習をしたり、家に招いてもらってアラブ料理をごちそうしてもらったり、私が餃子の作り方を教えたこともあった。ご家族にも本当によくしてもらって、第二の実家のように感じるまでになった。

最も不便だと感じたのは交通面だった。電車や地下鉄の類いは皆無で徹底した車社会であり、車がなければタクシーかバスで移動するしかない。歩道は整備されていないので非常に歩きづらい（というか、クウェートの炎天下を歩くことそのものが危険だったりもする）。少し遠出する時にタクシーやバスに乗るのは徐々に慣れることができたが、スーパーで買い物しようと思うと、スーパーは寮から見える位置にあるにもかかわらず、車の往来が激しい道を横切って歩いて行くという危険を冒すか、寮からのバスを利用するしかないと言う、不自由を強いられることになる。これに関してはショッピングモールへ出かけた時について買い物を買わせるなど、工夫して対応していた。

およそ11ヶ月に及ぶクウェート生活では、本当にたくさんの方にお世話になった。いろ

いろなバックグラウンドを持つ人と交流する中で自分自身のことを見つめ直したり、客観的にクウェートや日本がどんな社会であるのか考察する時間を持ったりすることができた。こちらでの生活は時間とお金に余裕があり、いつも何かに追われている日本の生活と違ってゆっくりと考え事をしたり、ゆっくりと勉強する時間を取れたりしたのが私にとって本当にプラスになったと思う。

これからクウェートに留学されるみなさんには、ぜひクウェートがどんなところか実際に目で見て、感じ取ってほしいと思う。本稿では特に言及しなかったが、クウェートは石油収入で非常に豊かなレンティア国家だ。豊かすぎるほど豊かなこの国で、どんな人々がどのような暮らしをしているのか、それを実際に見て言語化できるようになることだけでも、留学に来た価値があると思う。ランゲージセンターの友達やクウェート人と遊んで楽しかったというのもよいけれども、せっかくクウェートと言う日本人があまり訪れることのない国に滞在するのだから、そういった学びも大切にしてもらいたいと思う。